

新学術領域研究（研究領域提案型）

トランスカルチャー 状況下における 顔身体学の構築

—多文化をつなぐ顔と身体表現—

Contents

領域代表挨拶
研究組織
計画研究・公募研究
著書紹介
研究成果報告
イベントレポート
活動報告
今後のイベント

02

NEWSLETTER
2019 MAR.

バリ島〜勇敢な戦士の舞パリスより（撮影：河野哲也）



FACE & BODY

領域代表挨拶



Masami K.
Yamaguchi
山口 真美
(中央大学)

「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築—多文化をつなぐ顔と身体表現—（略称：「顔・身体学」）」領域も、2 年目を通過しました。これまでのご報告も兼ねて、ニュースレター第 2 号をお送りします。

2018 年度の話題の一つとして、大坂なおみ選手のめざましい活躍があげられると思います。英語でのコミュニケーションを得意とシアメリカでの生活が長い彼女ですが、全豪オープンの表彰式で、女王であるはずの彼女の、壇上を歩いていく中で無意識に頭をペコペコさせるほんのわずかな仕草を見て、そこにまぎれもない“同胞”を感じました。身体とはその人の出自を無意識にあらわすものであり、私たちは知らぬうちに漏洩していることを改めて感じた瞬間でした。身体動作はある種泥臭いものではありませんが、それこそが私たちの素をあらわすものなのだと思います。オリンピックイヤーをひかえ、それぞれの顔と身体が表現する文化について改めて考えてみたいと思いました。

本領域は、人文社会分野の心理学・文化人類学・哲学が協力して研究を推進しています。昨年 4 月より、新たに23の公募班が加わりました。昨年2回開催された領域会議にはたくさんの研究者が集い、懇親会で多くの研究者が活発に議論する様子が圧巻でした。第二回の領域会議ではそれぞれの専門ごとに小集団が集まって話をするような雰囲気だったのが、第三回領域会議ではさらに規模も増え、個々があちこちの集団へと渡り歩いて異なる分野の話を聞く場へと変化していく様子が印象的でした。若手研究者を積極的に招致したことも牽引力のひとつになったように思います。若手の力は、まさに、本領域の今後の発展を期待させるものでありました。

オリンピックを控え「入れ墨」の受容が話題となり、本領域の公募班の研究が数々のメディアで取り上げられました。日本という地域の中でこれまで入れ墨がどのように扱われてきたかを問い直すことは、意識の外に追いやられアンタッチャブルとされた事象について考えるきっかけのひとつになると思います。心理学から明らかにされたヒトの持つ本性、異端への忌避について、私たちは漫然と意識化しないまま過ごしています。“身体的に知ること”を封印してきたわけですが、

それらを意識化して理解すべき段階にあるのではないかと改めて考えさせられる出来事でした。また、古典作品に残された顔や身体、それぞれの人物の顔と身体をどのように表現してきたかを読み解くことは、文字には残らない無意識のレベルで、当時の社会文化が何を重要視し、何に注意を払っていたかを知るための手段のひとつになるのではないしょうか。

本領域のゴールを目指し、各分野が一丸となって問題解決の糸口を探るべく多くのイベントも行いました。本領域の根幹にかかわるものとしては、日本科学未来館でのトークイベント『ヴァーチャル世界でワタシはどうなる?』があります。携帯電話やスマホの普及を経て、ヴァーチャルリアリティチャットが現実味を帯びてきています。技術の進歩の中で変わりゆく“わたし”となる「身体の越境」について捉えるところみでもあります。異文化との交流だけでなく、科学技術の進歩によっても、私たちの顔や身体は越境していく可能性があるのです。このイベントは、ツイッターの「いいね!」数がなんと40 万件を越えるほどの衝撃的な反響を得ています。

哲学班と心理学班の協力で始まったこの試みは、哲学班・文化人類学班・心理学班の共同で2日間にわたって行った『トランスカルチャーとは何か?』のイベントにつながります。心理学班からは、顔身体へのプロジェクションマッピングの技術展示を踏まえて身体性についての議論を行い、哲学班からはトランスジェンダーという性の境界に関する事例、文化人類学班からはイスラムでのベールの使用の変遷を事例として、解放される身体と拘束される身体、越境の苦しみに対峙しつつ新たな変容を生み出す過程について論じていきました。

本領域は、「個の特性」から文化を考えるという視点に大きな特徴があります。トランスカルチャーとは、混在した多様なカルチャーの「越境」の試みといえましょう。越境する対象は社会・地域だけでなく、自身の性や身体そのものまでも含みます。それらは時代によっても変わります。イスラム圏でのベールの使用の多様性からは、設定された規範から逸脱していく歴史を語ることができるでしょう。さらに進んで、今後の技術革新により、顔や身体はどのように越境し続けていくのかを考えていきたいと思います。個々の視点から個々の多様性を重要視しつつ顔・身体という事象に基づき越境を考える、それが「トランスカルチャー」の理解につながると思います。本領域ではマクロとミクロの循環的な関係を基礎にした、人文社会の新たな学問領域を確立していく試みを続けていきます。顔・身体から個人と社会との関係を見つめ直すことにより、社会や個人の生き方を変

研究組織

計画研究

研究班	計画課題	役割	氏名	所属
A01-P01	顔と身体表現の文化フィールドワーク研究	代表	床呂 郁哉	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
		分担	西井 凉子	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
		分担	吉田 ゆか子	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
		分担	塩谷 もも	島根県立大学人間文化学部地域文化学科
		分担	田中 みわ子	東日本国際大学健康福祉学部
A01-P02	顔と身体表現の多文化比較フィールド実験研究	代表	高橋 康介	中京大学心理学部
		分担	島田 将喜	帝京科学大学生命環境学部
		分担	大石 高典	東京外国語大学世界言語社会教育センター
		分担	錢 昆	九州大学持続可能な社会のための決断科学センター
B01-P01	顔と身体表現の文化差の形成過程	代表	山口 真美	中央大学文学部
B01-P02	顔と身体表現における潜在的・顕在的過程	代表	渡邊 克巳	早稲田大学理工学術院
		分担	大塚 由美子	愛媛大学法文学部
B01-P03	顔と身体表現における感覚間統合の文化間比較	代表	田中 章浩	東京女子大学現代教養学部
C01-P01	顔と身体表現の比較現象学	代表	河野 哲也	立教大学文学部
		分担	小手川 正二郎	國學院大学文学部

公募研究

研究班	研究課題	氏名	所属
A01	顔色－表情知覚の相互作用の文化・世代間比較	南 哲人	豊橋技術科学大学エレクトロニクス先端融合研究所
	牧畜民社会における感情の身体表現とその変化：東アフリカ・マサイの事例から	田 暁潔	筑波大学体育系 / 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
	身体化された情動の文化化を探る—中国雲南省少数民族の身体的心性—	山田 祐樹	九州大学基幹教育院
	美しい／かわいい／不気味：顔情報変異の布置を用いたヒト普遍性／文化間変異の検討	橋彌 和秀	九州大学人間環境学研究院
	顔・身体表現から検討するトランスカルチャー下の装飾美	山本 芳美	都留文科大学文学部比較文化学科
	ミニマルな顔表現の文化的差異に関する研究	金谷 一朗	長崎県立大学情報システム学部
B01	Non-verbal communication through yawning	Tseng Chiahuei	東北大学電気通信研究所
	計算論的行動計測技術に基づく顔と身体表現における物理的対面の機能とその障害の解明	松田 壮一郎	筑波大学人間系
	顔の色と情動認識の異文化比較	溝上 陽子	千葉大学大学院工学研究院
	社会的相互作用を支える無意識の対人間協調ダイナミクス	三浦 哲都	東京大学大学院総合文化研究科
	社会的顔認知とその多様性の心理物理学的解析	本吉 勇	東京大学大学院総合文化研究科
	顔に由来する社会的価値が顔の記憶に与える影響とその神経機構の解明	月浦 崇	京都大学大学院人間・環境学研究科
	顔・身体認識理解への統合認知進化学的アプローチ：「発達－文化－進化」の観点から	友永 雅己	京都大学霊長類研究所
	複数人場面における個人特性と関係性の認知：表情手がかりの効果	上田 祥行	京都大学こころの未来研究センター
	大脳皮質処理と皮質下処理が顔認知に与える影響：計算モデルと心理実験による検討	稲垣 未来男	大阪大学大学院生命機能研究科
	可視的変形の手術後における自己顔の再認知過程	社 浩太郎	大阪大学大学院歯学研究科／NTT 西日本大阪病院
	個体関係認知の神経基盤とそのトランスカルチャー比較	岡本 正博	福島県立医科大学医学部
	顔面表情認知に及ぼす姿勢が及ぼす影響に関する実験的検討	渡邊 伸行	金沢工業大学情報フロンティア学部
	他者心理の手がかりとしての表情理解に関する哲学的・認知科学的研究	長滝 祥司	中京大学国際教養学部
	他者の視線が自己の行動に与える影響の文化差：二者同時記録fMRIを用いた検討	小池 耕彦	生理学研究所システム脳科学研究領域
	深層学習による顔・身体画像表現の異文化差の解明	林 隆介	産業技術総合研究所人間情報研究部門システム脳科学研究グループ
C01	日本、中世の絵巻物にみる人物表現の顔と身体の表情に関する研究	宮永 美知代	東京藝術大学大学院美術教育（美術解剖学II）研究室
	身振り概念の変化のメカニズムに関する美術史的考察—古代ギリシア・ローマ美術から	田中 咲子	新潟大学教育学部芸術環境講座

A01-P01 顔と身体表現の文化フィールドワーク研究

2018年度は本共同研究メンバー各自がそれぞれの対象国（インドネシア、フィリピン等）において各自のスケジュールに応じて1-4週間程度の臨地調査を実施し、各地の顔・身体表現等に関しての資料収集や文化人類学的フィールドワークを実施した。こうした臨地調査に関連する作業と同時に、2018年5月には東京外国語大学AA研において計画班C01-P01（哲学班）と合同でワークショップを開催し、概して「不完全な身体」に関する人類学や哲学の分野から若手報告者による報

告と検討を行った。また同年8月には立教大学で計画班C01-P01（哲学班）が実施したムスリムのヴェールをめぐるワークショップでも本計画班の塩谷もも（島根県立大学）准教授が報告者として参加し、インドネシアのムスリム女性のヴェール、スカーフの着用などに関して人類学的フィールドワークに基づく報告を実施した。さらに同年11月にはAA研で心理学や哲学の計画班や公募班の関係者を交えて実施した第3回シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔・身体学

の構築」などを通じた研究による知見を班内はもとより本領域の他班とも共有し検討を実施した。特に同シンポジウムでは領域全体のキーワードでもある「トランスカルチャー状況」を主要テーマとして取り上げ、佐藤知久（京都市立芸術大学）准教授を招いて同主題に関する特別報告を実施し、それを踏まえて計画班のメンバーを交えた集中討議を行った。本シンポジウムの報告書に関しては次年度（2019年度）の早い段階で刊行することを目指して準備作業中である。

関連出版物

- 床呂郁哉(編)2016『顔と身体表現に基づく異文化理解（シンポジウム報告書）』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 床呂郁哉(編)2017『トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築（シンポジウム報告書）』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 床呂郁哉・吉田ゆか子・吉田優貴(編)印刷中（2019年3月刊行予定）『国際ワークショップ トランスカルチャー状況下における顔・身体』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

A01-P02 顔と身体表現の多文化比較フィールド実験研究

2018年度の活動として(1)フィールド実験における顔表情認知研究と顔描画研究、(2)人類学と実験心理学の越境的学際融合、(3)アウトリーチについて報告する。(1)計画班メンバーが各フィールド調査地（タンザニア・カメルーン・雲南）において、顔表情認知実験及び顔描画調査を実施した。2017年度のフィールド調査で取得した図式的な笑顔と泣き顔のイラスト（ニュースレター Vol. 1参考）を刺激として用いたタブレット実験を実施した。予備的調査の段階ではあるが、各フィールドで描かれた顔イラストの中で、日本人が表情読み取り困難な顔刺激に対して、そのフィールドでは笑顔反応が増加するという結果が得られている。2019年度には再度タブレット実験を実施し、より

説得力のある結果を得ることを目指す。加えて、顔認知実験の過程から顔描画という手法の有用性が認められたため、新たな顔描画調査を実施している。モデルとなる顔を10秒程度提示し、その顔を紙に模写するという単純な課題の中で、どのような顔特徴が描かれるか、どの程度具体的に、あるいは抽象的に顔が描かれるか、などの検討を行っている(図1)。更にこの調査では、筆順を取得できる紙を用いて実験を行っているため、顔の中のどのパーツから順番に描かれるか、という点にも着目した分析が可能である。(2)本研究班の最大の特徴である人類学と実験心理学の学際融合に関する議論が進められている。特に人類学者がフィールドにおいてフィールド実験を実施した際の

発見を、実験心理学と人類学の双方の視点から見直すことにより、実験という枠組みの再考が迫られている。例えば実験という活動そのものが相互行為的であらざるを得ないこと、その中で生まれる語りの中に、新たな理解の形を見出す可能性があること、など、例を上げればキリがない。また人類学者がいわゆる「普通の実験室での実験」を経験することで、フィールド実験との対比を考える作業なども行っている。2018年度内に数回のフィールド実験経験者会合（A01-P02計画班+A01公募班）を重ね、徐々に問題点が明確になってきている。いずれの活動も我々研究班のメンバー構成や調査活動を通してのみ実現可能であり、本領域内でも貴重な知見を提供しうるものであるため、2019年度にはこの活動は更に加速させる。(3)アウトリーチとして、哲学班（C01-P01河野班）と連携して顔身体カフェを実施した（詳細は本ニュースレター活動報告を参考）。顔認知の中でも「顔を描く」という行為にウェイトが移りつつある。この行為はアウトリーチとの親和性が高く、2019年度も継続して実施する予定である。



図1: 描画課題（2018年度版）：左から日本サンプルとカメルーンサンプル2個ずつ

B01-P01 顔と身体表現の文化差の形成過程

【研究の概要】多様な人々が集う現代社会において、顔と身体表現の文化的な相違や個々のバリエーションを知ることが、異文化理解の観点から重要である。特に意識の外に追いやられた文化的相違を知ることが、異文化理解においては必須とされる。本研究では、こうした文化的差異や個人差の成り立ちを検討することを目的としている。特に、意識の外に追いやられた潜在的な過程の文化的差異を知るため、顔と身体表現の「顕在処理過程」と「潜在処理過程」の発達から検討する。さらに、顔認知が成立する乳幼児を対象に、顔認知における潜在的学习と顕在的学习という2つの学習プロセスの結びつきと、その定型と非定型な発達についても検討する。

【手法と対象】本研究では、スイス、フランス、カナダの研究者と共同で文化差の形成過程を検討し、か

つ脳科学の研究者と連携しながら、顔身体表現の文化差や個人差とその形成過程の神経基盤の解明を行う。手法としては、眼球運動計測と近赤外分光法(fNIRS)を用いることにより、顔処理の顕在的処理・潜在的処理の学習メカニズムの解明を進める。乳幼児の顔学習時の顕在処理を選好反応で、潜在反応を眼球運動計測やSCR(皮膚電位反応)計測を用いることにより、顔学習時の潜在処理と顕在処理メカニズムを解明する。さらに、臨床現場において定型児と非定型児の脳計測に近赤外分光法(fNIRS)を適用する。

【これまでの成果】これまでの成果として、顔から得られる第一印象の重要な2大因子である「信頼感」と「支配性」の獲得過程について検討し、生後6～8か月の乳児で、支配性が高い顔同士のペアでは信頼感の高い顔をより長く注視するという結果が

得られ、成人と似た顔の印象評価が、この時期に既に獲得されている可能性について論文を発表した(Sakuta Y, Kanazawa S, Yamaguchi MK. (2018) Infants prefer a trustworthy person: An early sign of social cognition in infants. PLoS ONE 13(9): e0203541.). (図1、図2) また近赤外分光法(fNIRS)を用い、顔処理に関わる側頭部位の脳活動の縦断研究を生後3～8か月まで行い、正面顔と横顔の処理の発達が異なり、その発達には個人差があるが、生後8か月に向けてその差が小さくなることを回帰分析により明らかにした(Ichikawa H, Nakato E, Igarashi Y, Okada M, Kanazawa S, Yamaguchi MK, Kakigi R. (2019) A longitudinal study of infant view-invariant face processing during the first 3-8 months of life. Neuroimage 186: 817-824.). (図3)

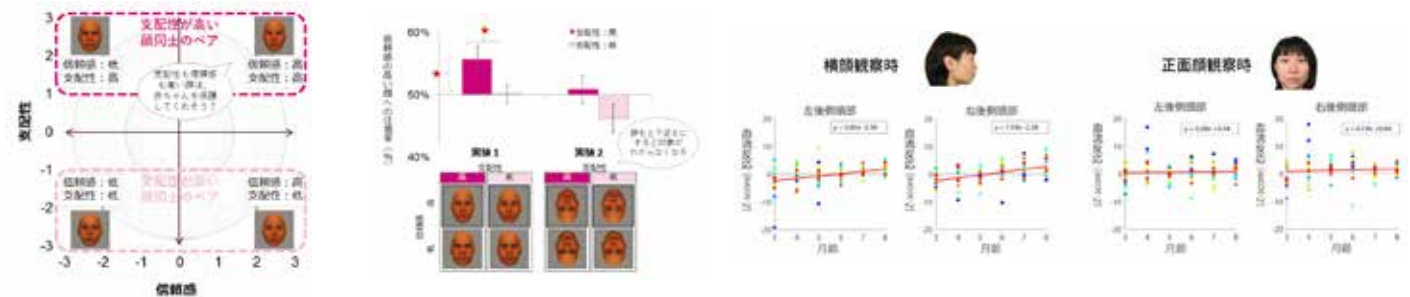


図1. 使用した顔画像の組み合わせ

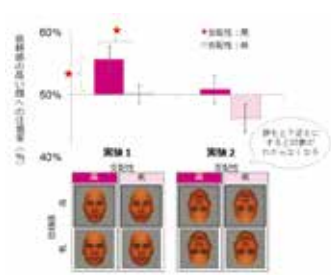


図2. 信頼感の高い顔への注視率(★は注視率に統計的に優位な差が見られたことを示す)

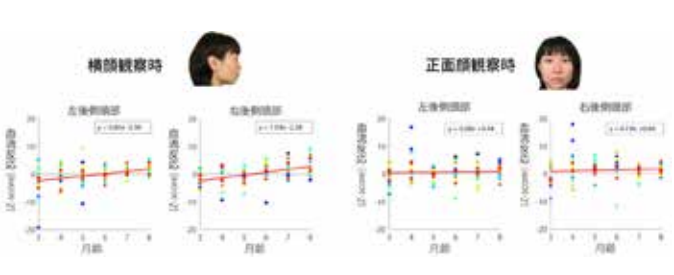


図3. 横顔観察時の側頭領域での血流反応(左)と、正面顔観察時の側頭領域での血流反応(右)。グラフ中の各点は、各乳児のそれぞれの月齢での血流反応を表している。赤い線は回帰直線。横顔観察時のほうが、回帰直線の傾きが大きく、月齢に伴う血流反応の増加が急であることがわかる。

B01-P02 顔と身体表現における潜在的・顕在的過程

多様な人々が集い、異なる文化が交錯するトランスカルチャー状況にある現代社会において、顔と身体表現の差異と普遍性とを明らかにすることは、異文化理解とコミュニケーションの観点から特に重要である。これまで、人間は明示的には気付いていなくとも、微細な差を無意識に検出して行動を変容させ

ることが、情動評価や意思決定を対象として示されてきたが、顔と身体表現という人間にとって真に必要な情報について、どのように無意識的な潜在処理がなされるかは明らかでない。本計画班では、顔と身体表現の文化差と個人差に注目して、顔認知の予測・記憶・選好に関する認知ストラテジーとダイナ

ミクスを顕在過程・潜在過程の観点から実証的に解明する。これまでスイス・フリブール大学(ロベルト・カルダラ教授)との顔データベース共同構築、米国・ミシガン大学(北山忍教授)との表情認知に関する脳波研究、オーストラリア・ニューサウスウェールズ大学(コリン・クリフォード教授)との視線研究に加え、相互訪問によるワークショップ・研究会の開催等、国際共同研究を着実に進展させている。また、国内においては幾何学的形態測定、機械学習による顔認識能力予測、視線予期等の新しいアプローチによる研究を進めており、今後これらのテーマについても国際共同研究へと発展させたい。



B01-P03 顔と身体表現における感覚間統合の文化間比較

【概要】トランスカルチャー状況にある現代社会において、文化的背景の異なる他者と円滑なコミュニケーションを実現するためには、自身の感情の表出、そして他者の感情の知覚を媒介する顔と身体表現の普遍性と文化特異性を知ることが不可欠である。感情の知覚には、顔や身体表現の視覚・触覚・運動情報、声の聴覚情報などが利用され、感覚間統合が本質的な役割を果たしている。本計画では顔・身体・声の認識様式の文化的多様性の根源として、感覚間統合に着目する。そして、幼

児期から成人にかけて感情知覚における感覚間統合の様式がどのように変化するかを比較文化的に検討し、得られた知見を統一的に説明する理論的枠組みの提唱をめざす。
【進捗状況】視線計測実験からは、児童期から大人にかけての時期に動的な話者の顔に対する注視パターンが発達すること、そのパターンは情動と音韻のどちらを判断するかに応じて異なることが示され、注視パターンの変化が多感覚知覚の発達につながる可能性が見えてきた。注視パターンの国際

比較も進行中である。また、感覚間統合の異文化再適応過程について、海外から日本への移住者を対象に fMRI 実験を実施している。身体に関する検討にも着手し、触覚による情動知覚、自己の身体運動に対する帰属感とその個人差・文化差について、興味深い実験結果が得られている。研究成果は、日本科学未来館でのオープンラボ、トークイベント、ワークショップなどを通して広く社会に還元している。



日本科学未来館で開催したワークショップ「わかるかな？人間の気持ちとロボットの気持ち」



日本科学未来館での実験イベント「ともにつくる サイセンタン！」「キャッチできていますか？相手の気持ち〜心理学のサイセンタン研究」



玉川大学で実施中のfMRI実験

C01-P01 顔と身体表現の比較現象学

2018年は、顔身体学の意義を明確にするために、顔・身体に関連する様々な哲学的問題を浮き彫りにすることに努めた。
そのなかで、2018年3月には、身体の現象学と神経科学を架橋する研究に従事するベルナール・アンドリュウ氏（パリ第8大学教授）を招聘し、哲学と心理学を横断するシンポジウムを開催した。つぎに、顔・身体に関わる人種問題や文化差から生じる倫理的な問題に注目し、同年5月には人類学班床呂氏（東京外国語大学教授）と共同で身体的経験をめぐるワークショップを、同年8月には、人種差別の現象学

的研究を推し進めているアリア・アル＝サジ氏（マギル大学准教授）とヘレン・ソグ氏（ディーキン大学講師）と共に、世界哲学会（北京）で人種の現象学に関するシンポジウムを開催した。その後、両氏を日本に招き、立教大学でイスラム・ヴェールに関するワークショップと、ソグ氏の最新の著作の合評会、また総括として差別と人種の現象学に関するシンポジウム（写真・左）を開催した。さらに、同年11月には、身体性認知の哲学の第一人者であるショーン・ギャラガー氏（メンフィス大学教授）の来日に伴い、ギャラガー氏と田中章浩氏（東京女子大学教授）、本研究

班代表の河野哲也（立教大学教授）による講演会を開催し、自己・主体・身体のある方に関して、心理学と哲学両方の観点から集中的な討議を行った。
以上のような活動と並行して、本研究班は、東京で二回、金沢で一回顔身体学カフェを主催した（写真・右）。顔身体学カフェでは多くの場合ほかの班と共同で開催することにより、各研究班の研究と一般参加者をつなげるアウトリーチ活動も行っている。今後も、こうした社会への研究発信を継続しつつも、顔身体学がもつさまざまな意義を明確にし、国際的かつ学際的な研究ネットワークの構築を目指したい。



顔色－表情知覚の相互作用の文化・世代間比較



南 哲人（豊橋技術科学大学エレクトロニクス先端融合研究所）

近年、顔の形状情報以外に、顔色や反射特性など顔の表面情報も顔認知に重要な機能を果たしていることが示されている。われわれは、これまで、心理物理実験を始め、脳波やfMRI等の神経科学的手法を用いて、統合的に顔色情報にアプローチし、顔色の処理が刺激呈示後170msに生じ、その処理に左紡錘状回顔領域が関与することなどを明らかにしてきた。さらに、「顔を真っ赤にして怒る」というような慣用句に表現されるように、顔色が表情認知にどのような影響を与えるのか調べてきた。具体的には、2つの表情をモーフィングし、あいま

いな表情画像を作成した上で、顔色を操作することにより、表情判別が変化するかどうかを調べた。表情認知に顔色が影響を与えるのであれば、あいまいな表情の判断を行う場合に顔色の情報が大きく影響を及ぼすと考えられる（例えば、怒っているのか、怯えているのかがあいまいな表情の場合、顔色が赤みを帯びていれば怒りの表情と判断されやすくなる）。その結果、顔色と表情知覚が相互に作用していることを示した。ただし、この実験は、日本人の20代を中心とした実験協力者を対象としたものであった。霊長類の色覚の進化的観点からも顔

色の重要性が示唆されていることから、顔色は日本人にとどまらず、ヒトの適応一般に共通する情報源であると考えられる。その一方で、顔認識において他人種効果と呼ばれる民族や人種が異なる顔の認識や識別が困難となる現象が存在するため、顔色への感受性において民族や人種間の差異が存在する可能性もある。そのため、文化間、世代間比較をして、顔色の効果を調べる必要がある。そこで、本研究では、顔色と表情認知の相互作用に関わる心理物理学実験を、文化間、世代間で横断的にを行い、その普遍性・特異性を調べる。

牧畜民社会における感情の身体表現とその変化：東アフリカ・マサイの事例から



田 暁潔（筑波大学体育系 / 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

感情をテーマにしてきた多数の心理学者が、「怒り」、「恐れ」、「嫌悪」、「悲しみ」、「喜び」といった五つの感情を、文化の枠を超えてすべての人類に見られる普遍的なものとして認識している（Ekmen, 2016）。その一方、表情やジェスチャーなどによって表現される感情は、地域文化に強く依存しており、身体的なメッセージがいかに認識されるのかについて理解することは、円滑なコミュニケーションが成立する上で不可欠である。しかし、これまでの研究の多くは、工業先進国や狩猟採集社会などの限られた地域集団しか対象にしておらず、社会変化による感情の示し方の変化についての議論も

十分にされてこなかった。
本研究では、牧畜民マサイを対象に、近代的な開発や学校教育、土地の私有化などによって激しく変化するマサイ社会において、対面的・非対面的な状況でおこなわれているインタラクションに五つの感情がいかなる表情とジェスチャーによって表出・認識されるのかを実証実験的な調査によって明らかにする。具体的には、都会、マサイの町、村落三つの環境で生活を営むマサイから、それぞれ性・年齢の異なる人々を対象とし、日常における対面的・非対面的な相互行為から五つの感情にかかわる表情とジェスチャーを、それらがどのよう

な状況において発生したのかと併せて、写真やビデオなどによって収集・分類・分析する。また、収集した身体表現とその状況をリストアップして、実験調査に用いるテストを作成し、前述の三つの地域のマサイそれぞれに、自分たちと異なる地域で収集された身体メッセージとそれらによって表された感情を認識してもらう。さらに、感情が発生する状況を選択肢から選んでもらい、これらの実験から得られたデータの整理・分析によって、同じ牧畜文化集団における感情の身体的表現と、それらの共通点・相違点を明らかにする。

身体化された情動の文化化を探る—中国雲南省少数民族の身体的心性—



山田 祐樹（九州大学基幹教育院）

認知心理学において、近年「身体化された情動」に関する研究が注目されている。例えばヒトの身体を中心とした上下空間に情動が関連付けられることが示されており、上=快、下=不快という関係性は極めてロバストに、文化普遍的に観察されてきた。しかし従来の研究は文明化された地域しか対象とせず、比較的広い地域の人々からの平均的な行動反応を取得していた。しかしある少数民族における歴史的経緯を考慮すると、これまでの知見とは全く異なった様相が呈される可能性が考えられた。
本研究では中国雲南省のアカ族を主な対象とする。彼らは

歴史的に低地に居住することを望みながらも、高地に「逃れざるを得なかった」人々である。すなわち、一般的な上=快、下=不快とは真逆の状況にてその文化を形成してきた。本研究は彼らとその他の部族集団（ハニ族、タイ族）との比較によって、歴史的な文脈が異なることによる身体化情動の違い、いわば「身体化された情動の文化化」について検討するものである。今こそ本研究によって初めて「身体化された情動のフィールド実験研究」を実施する時が来たのである。
具体的には、シーサンパンナ州の南糯山と格朗和に滞在してアカ族への調査・実験を行う。また景洪市全域にてタイ族

に対しても同様のことを行う。さらに、紅河ハニ族自治州の元陽に滞在してハニ族への調査・実験を行う。
本研究では1)アカ族、2)ハニ族、3)タイ族それぞれの(A)高齢者・(B)若年者の計6グループを対象とした、半構造化フォーカスグループインタビューによる質的研究と、単語定位・評定課題による量的研究を組み合わせた説明的順次的デザインに基づく混合研究方法を用いる。量的研究ではタブレットを刺激呈示・記録デバイスとして用いるが、対象部族集団は文字を持たないため単語刺激は口頭で呈示する。これらの量的・質的データの両方を統合して結果の解釈を行う。

美しい／かわいい／不気味：顔情報変異の布置を用いたヒト普遍性／文化間変異の検討



橋 彌 和秀（九州大学人間環境学研究院）

本研究は、顔刺激(形態)が持つ「美しさ」「かわいさ」そして「不気味さ」という属性に着目し、これらの印象を喚起する顔刺激特徴の関係について、合成顔をもいた実験によって検討する。従来別個に扱われがちだった「美しい」「かわいい」「不気味」という反応の相互関係を、顔というプラットフォーム上に付置することによって統合することを目指している。方法論に

における大きな特徴は、合成顔の素材として「オトナの顔」—「コドモの顔」をもちいる軸に「ヒトの顔」—「非ヒト(たとえば類人猿)の顔」という軸を加えて直交させ、仮想平面上で合成の比率を連続的に変化させて、被験者自身が操作するタブレット上で刺激を構成する手法を創案し採用する点にある。生物学的背景として想定される「配偶者選択」「養育」「生物学的

同種集団維持」等の適応上の要請に顔情報の微細なベクトルがどのように寄与するかを統合的に解明し包括的な展望を提示するためには、文化・社会間の変異／普遍性に特に注目してアプローチする必要があるため、文化比較・発達研究を計画に含め、この研究手法を多様な文化圏で適用し、並行して、幼児・学童児を対象とした研究へと展開する。



顔・身体表現から検討するトランスカルチャー下の装飾美

山本 芳美 (都留文科大学文学部比較文化学科)

本研究計画は、研究代表者の山本芳美(都留文科大学)、研究協力者の桑原牧子(金城学院大学)、津村文彦(名城大学)、大貫葉穂(京都造形芸術大学)、南玲子(日本文化人類学会)、山越英嗣(早稲田大学)、Matt Lodder (University of Essex) の7名で構成される国際共同研究である。この研究では、多文化的、トランスカルチャーの状況を踏まえて各文化の装

飾を比較する。「研究A」と「研究B」の2班にわかれて実施し、山本、桑原、津村の「研究A」では、イレズミやボディペインティング、化粧ほか、各種身体変工に魅力を感じさせる装飾パターンがあるのかを考察する。文化人類的なアプローチから、各調査地での写真、画像などを資料として、イレズミとボディペインティング、化粧を主軸に多文化間の比較を試みる。山

本、大貫、Lodderの「研究B」では、日本のイレズミの図柄に特化した研究をおこなう。それぞれがすでに進めてきた研究を基盤とし、さらにそれを他の研究者との交流で発展させることで、着実に成果につなげることとしたい。



ミニマルな顔表現の文化的差異に関する研究

金谷 一郎 (長崎県立大学情報システム学部)

ミニマルな顔表現は世界各地で見られるデザインであり、かつヒューマノイドのような人に似せた人工物デザインの基本になるものである。しかしながら、ミニマルな顔表現およびその変化に対して、表現と感情との対応付けやその文化的差異を詳しく調べた研究は少なく、工業応用への研究は緒についたばかりである。本研究提案は幾何学的に抽象化された顔、すなわち「左目」「右目」「口」に相当する図形要素3点からなる「ミニマルな顔表現」および「ミニマルな顔表現の動き」と、それらの顔表現と感情との対応の文化的差異を明らかにすることを目的とし、人工物デザインへの応用までを考慮する。本研究提案者らはすでに日本において予備的な調査を済ませているが、本研究提案にあわせて新たに日本での再調査を行うため、本再調

査を含めて、研究期間内に(1)日本での再調査、(2)東アジアから1カ国の調査、(3)中東から1カ国の調査、(4)西欧から1カ国の調査を行う。具体的な調査内容は(A)複数のミニマルな顔表現を提示し、被験者が感情を読み取る「静的ミニマル表現マッピング」、(B)ミニマルな顔表情の「動き」を提示し、被験者が感情の「動き」を読み取る「動的ミニマル顔表現マッピング」、(C)ミニマルな顔を被験者に描かせる「顔表現サンプリング」である。本調査を研究期間内に行い、統計処理および機械学習によってミニマル顔モデルの構築を行う。本研究提案は今後急速に進歩、普及するとみられるヒューマノイドロボットの顔表現、顔デザインに関するものである。工業生産的にはロボットハー

世界各地で異なる傾向があるため、工業デザイン的にもミニマルな要素を組み合わせたほうが世界各地の顔を模倣するよりも好ましい。一方で、顔の作り出す表情というソフトウェアの側面は、文化的に極めて重要であるにも関わらず、従来は工業デザイナーあるいはエンジニアによる直感と経験とに頼ってデザインされてきた。本研究提案は従来の直感と経験に頼っていた部分に秩序と方法をもたらすことで、ヒューマノイドロボットの工業生産、工業デザインに対して世界的なインパクトを与えるとともに、ヒトが顔をどのように認知しているかという問題に対してヒントを出す役割も併せ持つ。



Non-verbal communication through yawning

Tseng Chiahuei (東北大学電気通信研究所)

Yawning is a universal phenomenon across cultures, vertebrate species, and developmental stages. We test the social-communication hypothesis of yawning which suggests that yawning is a non-verbal form of communication that synchronizes the behavior of a group. We design hypothesis-driven experiments with behavioral and physiological measurements to investigate the

social benefits and the underlying mechanism of yawning and its contagion effect. This is in contrast to the previous studies which are mainly conducted with observational or correlational methods. Although yawning has very different meanings in the western and eastern cultures, surprisingly, there is little cross-culture comparison studies. As non-verbal expressions help an observer to deduce

a group' s norm and social value when entering into a new context and culture, studies in this direction are warranted. Our studies will be extended to cultural group comparisons between Japan, Taiwan, and UK as it offers a convenient platform to tap into the inter-cultural understanding.



計算論的行動計測技術に基づく顔と身体表現における物理的対面の機能とその障害の解明

松田 壮一郎 (筑波大学人間系)

視線は刺激と反応、2つの機能共に顔・身体表現の基盤であり、対人相互コミュニケーションで重要な役割を果たす。本研究ではウェアラブルデバイス、モーションキャプチャシステム、視線推定などの計算論的行動計測技術に基づき、情報工学や臨床発達心理学と緊密に連携をしながら、アイコンタクトとは異なる、認知科学的に新しい現象としての物理的対面の機能とその障害の解明を目指し、系統的な実験研究を実施する。

(1). 物理的対面の機能的役割解明: 会話場面における相互作用場面で、話し手・聞き手双方の物理的対

面とアイコンタクトの同時計測実験を行う。会話時の質問/回答やゲームの交互交代時に計測を行い、物理的対面・アイコンタクトの頻度、タイミングや持続時間の解析を通じ、物理的対面の言語コミュニケーションにおける機能について検討する。また、二者間の相対的位置関係、二者間距離、発話(質問)内容、相手の親密性などの空間・社会的要因の影響を明らかにする。

(2). 物理的対面の障害解明: 共同注意・行動的要求・社会的相互作用の場面で、自閉症児・療育者双方の物理的対面とアイコンタクトの同時計測実験を行

う。社会的行動の始発/応答時に計測を行い、社会性に障害のある自閉症スペクトラム障害(ASD)児と定型発達児間の比較を通じ、物理的対面の非言語コミュニケーションにおける機能とその障害について検討する。

本研究を通じて、アイコンタクトと物理的対面の機能分離を目指す。同時に、ディスプレイを媒介した対面・アイコンタクトではない、物理的対面下における二者同時計測という実験手法から、「見る/見られる」といった社会的行動の機能の身体性を明らかにし、新たな実験パラダイムの構築を目指す。



顔の色と情動認識の異文化比較

溝上 陽子 (千葉大学大学院工学研究院)

顔の色や質感は、年齢、健康状態、印象、審美性など、人間にとって重要な判断に大きく関わる。しかしその認識特性は、従来の色彩学の知見が当てはまらないことが多い。例えば、日本人女性の顔をを用いた研究では、顔の明度が等しい場合でも、赤みを帯びた顔は黄みを帯びた顔よりも明るく見えることが示されている。このような肌色特有の知覚は、肌の色の分布特性や肌色変化を認識するための特別な視覚メカニズムによって引き起こされると考えられる。前述の通り、顔色は健康状態や感情を読み取る情報となるが、実際に私たちがどの程度敏感に顔色を知覚しているか、そこからの程度

情動を読み取るのかについては明らかではない。また、人種や文化により、顔の色分布や色変化の仕方および表情の出方が異なることから、それらが顔の色知覚と情動認識の関係にも影響する可能性がある。そこで本研究では、顔の明るさ認識に対する色相の影響、顔色の識別能力、顔色の変化に基づく情動判断、それぞれに対する人種・文化の違いを検討する。期間中に下記の課題に取り組む計画である。

- 1.顔の明るさに対する色相の影響の異文化比較
- 2.顔色の識別能力の異文化比較
- 3.顔色変化が情動の認識に与える影響の異文化比較

複数の人種の顔を評価刺激画像として用い、日本、欧米、東南アジアなど、様々な国で、顔の明るさ認識、顔色の識別、情動認識を調べる視覚評価実験を行う。その結果を比較することにより、異文化間に共通の顔色の認識特性があるかを調べる。また、その観察時の脳活動と認識との対応関係についても調べる。本研究により、「顔色知覚特性」と「顔色知覚と情動認識の関係」に対する異文化の影響が明らかになれば、グローバル社会における円滑な異文化コミュニケーションおよび化粧品、写真、医療など、多岐に渡る分野に貢献できると考えられる。



社会的相互作用を支える無意識の対人間協調ダイナミクス

三浦 哲都 (東京大学大学院総合文化研究科)

社会相互作用を探るヒトの二者間運動協調の研究は、二人が座位で手に持った振り子を含わせる協調運動課題によって検討されてきおり、顔が与える影響については検討されていない。近年、二者が向かい合って立つと姿勢動揺が無意識的に同期することが報告され、この同期が社会相互作用を支える神経系の機能として注目され始めている。しかしながらこれらの研究は、姿勢動揺の時系列データの相互相関により同期を定量化するにとどまっており、その背後に潜

むダイナミクスは検討していない。つまり二者の身体の潜在的な協調ダイナミクスと、顔がそれに与える影響は不明である。そこで本研究は、非線形因果性解析、複雑性解析等の数理解析を用いることで、顔(対面条件、背面条件)が運動協調に与える潜在的な影響を検討する。初年度は、二者の対面、背面の静止立位時の姿勢動揺を計測し、上述した方法論により二者の協調ダイナミクスを定量化する。次年度は初年度で明らかにした二者の協調ダイナミクスが、個人の心

理特性や相手への心理状態によって、どのように修飾されうるのかを検討する。本研究により、顔が二者間の運動協調に与える潜在的な影響を定量化する方法論を確立することで、顔が社会相互作用に与える影響や、その発達段階に関する研究や、国際比較研究が可能となり、トランスカルチャー状況下での顔身体学の発展に大きく貢献できる。



社会的顔認知とその多様性の心理物理学の解析

本吉 勇（東京大学大学院総合文化研究科）

顔認知研究の最も基本的な問題の一つは、観測者が画像に含まれるどのような情報を用い顔の物理的・社会的属性を認識するか、である。本研究計画では、相貌、表情、社会的ステレオタイプなど顔に関する様々な属性の判断において、個々人の観測者が利用する顔画像のなかの情報をより効率のかつ快適に抽出することのできる新たな汎用心理物理学のデコーディング手法群を開発・実装するとともに、それらを駆使して顔認知の個人差・文化差を定量化する新たな研究プラットフォームを構築し、いくつかの重要なテーマについて実証することを目的とする。(1) 顔認知

研究では、顔画像をノイズの中に埋め込んだり、ランダムに配置された複数の小さな窓を通して提示した刺激を用い、ノイズや窓の位置と観測者の反応の相関関係を分析することにより、観測者が刺激のなかのどのような情報を利用していたかを数値化する逆相関法がしばしば用いられてきた。しかし、従来の方法には、刺激が明らかに不自然である、莫大な試行数を必要とする、といった問題がある。本研究では、自然な見えをもつ顔画像に対する反応から効率的に観測者の情報利用方略を明らかにする手法を開発し、その有効性を実験により検証する。(2) 顔認知研究では、多く

の顔画像について「どれくらい〇〇か」という心理値を集めることが格別に重要である。そのための古典的方法としてマグニチュード評定が用いられてきたが、社会的ステレオタイプなどの曖昧さをもつ次元で安定したデータを集めるのは困難である。一方、いわゆる一対比較方法は判断が容易で安定した尺度を得ることを可能にするものの、刺激が多くなるにつれ必要な反応数が爆発的に増加するという問題をもつ。そこで、少数の試行に基づき多数の顔刺激に関する任意の心理尺度を効率的に構成する心理物理学的手法を開発し、それを様々な顔認知判断課題に適用する。



顔に由来する社会的価値が顔の記憶に与える影響とその神経機構の解明

月浦 崇（京都大学大学院人間・環境学研究科）

ヒトの顔には多くの社会的情報が含まれている。そのような顔由来の社会的情報は、ヒトとヒトとの間の社会的相互作用の場面において重要な情報として利用されている。たとえば、初対面の他者が自分にとって魅力的に感じる顔であれば、私たちはその他者に対して好印象をもち、その顔を後々までよく憶えておくことができるかもしれない。しかし、顔に由来する社会的価値が顔の記憶に対して与える影響とその神経基盤については、未だに十分に理解が進んでいない。また、顔に由来する社会的価値は普遍的なものではなく、世代や環境の違いによって影響を受けるため、顔の社会的価値が顔の記憶に与える影響もそれらの違

いによって変化することが予測される。本研究では、世代の違いによって影響を受ける顔に由来する社会的価値が、顔の記憶に対してどのような影響を与え、それがどのような脳内機構を基盤としているのかについて、機能的磁気共鳴画像 (fMRI) 研究から明らかにすることを目的とする。本研究では、次の2点について研究を進める。第一の研究では、顔の外見的な「魅力」と顔から感じられる他者への「信頼感」に着目し、それらの社会的情報の間の相互作用によって形成される人物の印象が、顔の記憶に与える影響とその神経基盤を明らかにする。また本研究では、健康若年成人と健康高齢者に対して

同様の課題を実施し、そこから得られたfMRIデータを群間比較することで、顔の印象が顔の記憶に与える影響の基盤となる脳内機構が、加齢の効果によってどのように変化するかについても解明する。第二の研究では、顔の新近性判断において顔に由来する社会的情報が与える影響とその脳内機構、およびその加齢変化について、健康若年成人と健康高齢者を対象とするfMRI研究から解明する。これらの研究を通して、顔がもたらす社会的価値が顔の記憶に与える影響とその加齢変化について、その基盤となる脳内機構の全容の理解をめざす。



顔・身体認識理解への統合認知進化学的アプローチ：「発達－文化－進化」の観点から

友永 雅己（京都大学霊長類研究所）

顔という社会的刺激が発信する情報は多岐にわたるが、現生種間での比較研究を主軸とする比較認知科学では、種や個体に関する情報の認識の研究が圧倒的に多く、性別、年齢、健康状態などそれ以外の重要な情報の知覚・認識については、十分に解明されているとはいいがたい。また、霊長類以外の系統群に目を向けると、種認識や個体認識といった問題でさえ未解決である。さらに、社会的な信号を発信する出力器は顔に限らない。身体そのものもまたわれわれの情報伝達手段として重要な役割を担っている。このことは、ヒトに限ったことではなく霊長類全般に言える。彼らはこのような

身体をどのように知覚・認識しているのだろうか。同種の身体と他種の身体の相同性の理解や、成長し変化を続ける身体の一貫性に関する理解に関する研究はまったくの未踏の領域であるといえる。顔および身体は、ともに「全体的処理」を受けることがヒトでは強く示唆されている。本研究計画では、まずこの「信号発信器官」と「全体的処理」という2つの類似性から、顔認識と身体認識の諸相を比較認知科学的に検討し、その相互関係について、系統発生の制約と収斂－多様性の観点から明らかにしていく。この目的を一步步つ達成すべく、個別の研究課題を複数設定し、相互に関連づけつつ

進めていく。計画している研究課題は以下の通りである。(1) 身体知覚における1 次構造／2 次構造の影響の比較認知発達研究、(2) トップダウン的顔知覚の比較認知発達研究、(3) 顔・身体認知と年齢認知の関係、(4) イルカおよびウマにおける身体知覚、(5) 身体の認識に関する進化－文化－発達である。これらの課題には比重の多少こそあれ、「進化－文化－発達」という3つの時間軸から認知を考えるという視点が取り込まれている。それぞれの課題について主としてチンパンジーを対象に研究を進めるが、同時にヒトの成人・乳幼児、さらにはイルカやウマなどの哺乳類も対象に研究を進める。



複数人場面における個人特性と関係性の認知：表情手がかりの効果

上田 祥行（京都大学こころの未来研究センター）

円滑な社会生活を送るためには、他者の見た目や行動、喋り方などから、その人物の性格特性や行動の意図を推測し、それに応じた行動をしなければならない。そのため、これまでの多くの研究では、他者に対面する場面において、相手の性格特性の推測に影響を与える要因が検討されてきた。しかし、普段の生活を考えると、私たちが一度にコミュニケーションをとるのは、必ずしも一人の他者とは限らない。例えば、会議・団体スポーツ・集団交流などを考えると、複数人の関係性を理解し、その関係性に応じた振る舞いをしていと考えられる。このような複数人場面における

人物の関係性の判断は、「1対1の対面場面で推測された性格特性は、集団の中でも同様に機能している」と考えられていたため、これまであまり検討されてこなかった。本研究代表者らが、実際に対面場面で推測された性格特性が、集団内で同様に機能しているのかを調べたところ、集団内の関係性の判断には集団成員のパーソナリティの推定とは別のメカニズムで行われていることが示された。このような集団内の関係性の判断には、文化の中で共有された無意識的なコミュニケーションの様式・規範が反映されている可能性がある。そこで本研究では、包括的・関係性重視なもの

の見方が優勢であるとされる東アジア文化圏および分析的・独立性重視なものの見方が優勢であるとされる西洋文化圏において、これらの文化が集団における関係性の判断に与える影響について検討する。西洋文化圏としてアメリカおよびイギリス、東アジア文化圏として日本および台湾において、①集団内の関係性の認知と集団成員のパーソナリティ特性の認知の違いがそれぞれの文化で見られるか、②自己の所属文化圏および非所属文化圏の人物集団においてこれらの認知特性は異なるのか、③これらの認知特性を司る神経基盤の違いについて明らかにする。



大脳皮質処理と皮質下処理が顔認知に与える影響：計算モデルと心理実験による検討

稲垣 未来男（大阪大学大学院生命機能研究科）

本研究は大脳皮質経路と皮質下経路が顔の視覚的な認知過程に果たす役割の解明を目標とする。霊長類で高度に発達した大脳皮質経路と進化的に古い皮質下経路は顔認知の異なる側面を担うと考えられるが、その解明には同時に並列的に働く2つの神経経路の影響を切り分ける必要がある。この問題点に対して、大脳皮質経路処理と皮質下経路処理の計算モデルをそれぞれ構築し、それら2つの計算モデルから新規視覚刺激を作成して心理実験を行う研究を提案する。2つの神経経路処理の働きをそれぞれ特異的に強調する人工的な顔画像を使って心理実験を行

うことで、それぞれの経路処理が顔認知のどのような側面に貢献しているのかを明らかにする。神経経路処理の計算モデル構築に当たっては、実際の脳のふるまいに近いモデルとなるように拘束条件を指定する必要がある。私はこれまでに神経活動記録実験を通じて、大脳皮質と皮質下における顔の視覚情報処理の特性を個々の神経細胞レベルで調べてきた。これら神経生理学の実験結果をモデルの拘束条件として利用するとともに、過去の神経解剖学の知見もモデルの拘束条件として利用する。完成した2つの計算モデルを使って、2つの神経経路処理の働きをそれぞれ

強調する顔画像を人工的に作成する。神経科学の知見を生かした計算モデル構築と視覚刺激作成に取り組む。顔の表情認識課題を基本として、さまざまな種類の心理実験（正答率、反応時間、皮膚コンダクタンス反応など）を行い、大脳皮質経路と皮質下経路の2種類の強調顔画像に対する反応を比較する。大脳皮質経路処理と皮質下経路処理が、意識的な反応だけでなく無意識的な反応も含めて顔認知のどのような側面に貢献しているのかを調べる。本研究は計算モデル構築と視覚刺激作成を通じて心理学・認知科学と神経科学の融合的な研究を目指す。



可視的変形の手術後における自己顔の再認知過程

社 浩太郎（大阪大学大学院歯学研究科／NTT西日本大阪病院）

人間にとって、自己の顔は、社会の中で唯一無二の自己を象徴するものであり、表情表出を介して他者とのコミュニケーションを可能にするものである。我々の脳には、他者の顔との対比的な、自己の顔に特有の脳内表象が存在することが知られている。このような自己の脳内表象は、どのように形成されるのであろうか？また、その表象は可塑的で、更新され得るのだろうか？これらの問いは顔認知の神経科学における未解決の根本問題である。この問いを検証するためには、論理的には、顔を変化させ、新しい顔を再び自分に特有の顔として新しく表象する過程を検証する必要がある。

この方法論は、多くの心理学者や神経科学者には、倫理的にも方法論的にも立証不可能に思われる。しかし、顎変形症を有する患者の顔の可視的変形（VD）を外科的矯正治療により、合目的的に治療することによって、この問いの検証が可能となる。研究代表者は、変形した顎顔面の運動スキルは正常以下の値から、手術によりさらに低下して、その後約2年かけて正常値にまで回復することを示してきた。患者の社会的なQOLも、術後の低下から約1-2年かけて標準以上まで上昇することが示唆されている。そこで、本研究は、「自己顔の脳内表象は手術の介入で攪乱されて一時的に他者顔の表象へ融合されるが、

術後2年間で別の新たな表象へと分化、更新される」という仮説を立て、行動学的手法と神経科学的手法による仮説検証を行う。本研究では、顎骨切除術で急激に変化した新しい顔を、患者はいつ、どのように、どのくらい独自の顔として再認知するかを明らかにする。神経科学的手法（脳機能画像 (fMRI)）で分かる潜在的な認知の変容過程、心理行動学的手法で分かる顕在的な認知の変容過程及びそれらの関連を検証する。本研究は、外科的矯正治療の診断・治療・ケアを専門とする臨床研究者と認知・運動神経科学を専門とする研究者との共同研究である。



個体関係認知の神経基盤とそのトランスカルチャー比較

岡本 正博 (福島県立医科大学医学部)

社会的認知能力には、対象である個体（人物）を識別し、その個体との関係（血縁、グループ、協力・非協力など）を認知する能力が含まれる。最近の進化心理学の知見からは、社会集団のサイズの急激な増大が、ヒト化(hominization)における大きなステップであったことが示されている。このため、大規模な社会集団における複雑な個体間関係を処理する認知能力がヒトにおいて高度に発達したことが強く示唆される。しかしながら個体間関係の認知に関する神経科学的研究はこれまで殆ど行われていない。最近、機能的磁気イメージング (fMRI) 信号に対する巧妙なコーディング・デコーディング技術が発達し、fMRI を用いた、脳

内における情報表現の解明が可能になりつつある。本計画ではこのようなfMRI コーディング・デコーディング技術の最近の進歩を、個体間関係の認知に関する神経科学的研究に応用し、以下の二点を明確にする。1.個体（人物）知識の脳内表現：社会心理学的に、個体（人物）に対する知識は、心理尺度に対する多変量解析の結果、3-5 次元程度の意味空間内に構造化されることが示唆されている。しかしながら、人物に対する知識の脳内表現がどのように構造化されているかについては明確でない。本研究では自然言語処理技術などを用いて人物関連知識の構造を明らかにした上で、fMRIコーディング・デコーディング技術を

用いて、人物に関する知識の脳内表現がどのように脳内に表現されているのか、とくに、複数の意味的カテゴリーに基づき構造化されて表現されているのか、を検証する。2.家族（親族）関係の脳内表現：最も基本的な個体間関係のプロトタイプとして家族（親族）関係がある。文化人類学的に、家族関係は未開社会のコミュニケーションの基礎構造であったことが示されている。しかしながらヒトの家族関係の脳内表現に関する研究はこれまで殆ど行われていない。本研究ではfMRIコーディング・デコーディング技術を用いて、家族関係がどのようにヒトの脳内で構造化され、表現されているのか、を検証する



顔面表情認知にしぐさ・姿勢が及ぼす影響に関する実験的検討

渡邊 伸行 (金沢工業大学情報フロンティア学部)

他者の顔から「喜んでいる」、「怒っている」というような情動を読み取る顔面表情認知において、しぐさや姿勢がどのような影響を及ぼすか、検討することを目的とする。表情認知に関するこれまでの心理学研究において、「快―不快」、「活動性」という感情的意味次元に基づく判断が行われていることが、繰り返し確認されてきた。また、表情認知に影響を及ぼす顔以外の文脈情報（顔以外の非言語情報、表情が表出された状況、表出者と観察者の関係性、および文化差など）は、上記の感情的意味次元に基づく判断の段階で影響を及ぼすと言われている。本研究では文脈

情報の一つであるしぐさ、姿勢に着目し、表情と組み合わせた場合に、表情認知にどのような影響を及ぼすか、検討する。実験では、表情としぐさ、姿勢を組み合わせた画像を刺激として呈示し、実験参加者に表情の意味評価や、感情カテゴリー判断を求める。表情は基本表情(喜び、驚き、恐れ、悲しみ、怒り、嫌悪、軽蔑)の典型表情や、より自然な状況で表出される表情などを用いる。しぐさや姿勢については、Posture Scoring SystemやBody Movement Scoring Systemなどの非言語行動分類システムに基づいて選出する。モデルに表情としぐさ、姿勢を組み合わせた演技を求

め、それを撮影して刺激画像とする。撮影した刺激は、Facial Action Coding System (FACS)や上記の非言語行動分類システムに基づいた分析を行い、刺激の妥当性を確認する。実験ではセマンティック・ディファレンシャル法に基づいた評価や、感情カテゴリー判断などを実施する。分析によって、しぐさや姿勢が表情認知にどのような影響を及ぼすかを明らかにしたい。また、可能であれば比較文化研究を実施して、しぐさや姿勢の影響の文化差などについても明らかにしていきたい。



他者心理の手がかりとしての表情理解に関する哲学的・認知科学的研究

長滝 祥司 (中京大学国際教養学部)

現象学が身体性や志向性などの概念を使って明らかにしてきたように、人間の日常経験は、意識されない知覚や行動が多くを占めている。同時に、われわれが他者の行動や心的状態を理解する際にも、多くの場合無意識に、表情や身体動作を読み取ったり、それらをもとに他者に一定の心的性質や道徳的性質を帰属させたりしている。本研究では、現象学や心の哲学を理論的背景として、心理学や脳科学の実証的方法によって得られたデータを用いながら、人間が無意識に行なっているそうした作業に基づく他者理解のメカニズムを解明することをめざす。このメカニズムを解明

するために、(ア) 現象学や心の哲学を中心とする哲学的な理論と、心理学や脳科学のような自然科学とを適切に融合するための新たな方法論を作ること、(イ) 心理学的、脳科学的な実験を遂行し、そこで得られたデータを(ア)で構築した方法論にもとづいて分析し、(ウ) この分析にもとづいて(ア)の方法論を反省的に洗練させていくこと、の三つを行う。具体的な実験手法については割愛するが、われわれは、上記の実験によって人が他者の心的状態や特性を理解する際に何を手がかりにしているかを解明するためのデータを三つ得ることになる ((A)他者の作業映像を

観察して、その人の心的特性等を理解するときどこに注目したかを被験者が具体的に記述したデータ、(B) この具体的記述データを質的研究ソフトNvivoVer.11によって解析したデータ、(C)作業映像を観察している際の被験者の脳データ[EEGデータ・EOGデータ・Muリズムデータ]）。これらのデータをどのように関連づけるかが、先のメカニズムの解明にとって重要な鍵となる。以上の試みによって、他者理解をめぐる日常経験に関して、その自然化可能性の射程と限界が明らかになることが予想される。



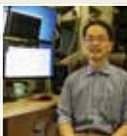
他者の視線が自己の行動に与える影響の文化差：二者同時記録fMRIを用いた検討

小池 耕彦 (生理学研究所システム脳科学研究領域)

視線を介した非言語コミュニケーション（みつめあい、共同注意など）は、ヒトの発達段階の初期に獲得される社会能力であり、他の能力の基盤となっている。視線コミュニケーションは出力（行動）と入力（知覚）が眼球という同一の組織で担われていることから、その理解においては二者間での再帰的な情報交換という側面を無視することはできない。私はその神経基盤を、二者同時記録可能な機能的磁気共鳴画像法(fMRI)を用いて検討してきた。その結果、視線コミュニケーション中にヒトは、視線や瞬きの情報を他者のそれに随伴させること、それに伴い右下前頭回の脳活動相関が観察されることを示した。自他の行動を

無意識的に随伴する作用は、個人脳内では知覚-運動連合によって担われており、これが他者の視線を自分の行動に組み込み、二者を一つに繋ぐメカニズムの基盤と考えられる。自他の視線を随伴させる行動は、一緒に物を探する場合などに見られる、一般的な社会行動である。しかしその行動の文化差については、全く明らかになっていない。先行研究によれば、日本人はフィンランド人と比較して、視線が向けられた顔画像を「近づきたい」と評価する。このことは他者の視線を自分の行動に反映するメカニズムおよびその神経基盤にも、文化差がある可能性を示唆する。本研究では、以下の目標を設定して、社会的場面で自他の視線

を随伴させる行動およびその神経基盤について、文化特異性および汎文化性を解明する。目的1：コミュニケーション場面において他者の視線情報を利用する傾向の文化差および共通性を検討する。他者の視線情報をリアルタイムで利用可能な視覚探索課題を用いる。目的2：他者の視線利用について異なる方略をとる異文化間でコミュニケーションをおこなった際に、発生する現象を解明する。目的3：他者の視線情報を利用して自分の行動に活かす際の脳活動を二者同時記録MRIにより記録し、文化を超えた共通性および文化差について検討をおこなう。



深層学習による顔・身体画像表現の異文化差の解明

林 隆介 (産業技術総合研究所人間情報研究部門システム脳科学研究グループ)

顔と身体表現の異文化を作りあげるメカニズムの一つとして、各コミュニティ内での発達過程における視覚体験の違いがあげられる。視覚体験の違いが、脳内情報表現にどのような違いを引き起こすのか情報工学的に解明することは、赤ちゃんを用いた発達研究や異文化間の比較心理学的研究とならんで、顔・身体学の構築に不可欠な研究アプローチである。視覚情報処理装置としての脳は、階層的な量み込み演算により、さまざまな入力画像を復号化可能な形で圧縮表現

する符号化装置ととらえることができる。こうした情報処理は、深層ニューラルネットを利用した機械学習法によって実装可能となりつつある。本研究では、人間の脳が視覚情報処理を学習する際の学習原理として、各ニューロン活動の情報量最大化やスパース性といった拘束条件を仮定し、大規模な顔・身体画像データを学習した深層ニューラルネットワークが、どのような顔・身体情報表現を自己組織的に獲得するのか明らかにすることを目標とする。そし

て、当該新学術領域内のフィールドワークを行うグループから、さまざまな文化圏で収集された画像データを提供いただき、深層ニューラルネットを文化圏別に学習させ、個々の深層ニューラルネットが獲得する画像特徴量や画像統計量を比較検討することで、顔と身体表現の文化差を生み出す基礎的メカニズムの情報工学的解明をめざす。



日本、中世の絵巻物にみる人物表現の顔と身体表情に関する研究

宮永 美知代 (東京藝術大学大学院美術教育(美術解剖学II) 研究室)

日本人の顔の表情や身体表情は、性、年齢、当時の社会的身分、また時代ごとにどのように異なったのか。写真以前の顔や身体表情等については、専ら文献から意味内容が解釈されてきた。一方で絵画等の造形作品の人物表現をもとに、描かれた個々の顔を具体的な表情や動作を有する人の姿として、解剖学的構造

との関係で論じ、あるいは描かれた人物の顔と身体表情や仕草についての調査はほとんど行われてこなかった。本研究では、日本の鎌倉時代の絵巻に見られる多様な人物表現の顔と身体表情について、個々の顔面器官の形と配置等の顔の特徴と構造との対照、および表情をつくる各器官の形を類型別化等の

分析をし、表情についての顔の特性から、統計的・実証的手法をも採り入れ、表情の描写の特性、及び、描かれた中世の人々の顔と身体表情特性について、多様な切り口から重層的に顔と身体表情の特徴を明らかにしていく。



頃から紀元後5世紀に至る約1500年という長期間に及ぶが、その間、文化は、巨視的に見れば直接的な継承が続いてきたといつてよい。例えば、絵画や彫刻といった造形表現においては、人物像の身振りが言語として機能して文字に代わる意味伝達の役割りを担ったわけであるが、その多くは時代を超えて継承された。しかし他方、同一の身振りが時代や文脈において異なる意味を付与されることもあった。また、特定の身振りが性差や民族の違いを特徴付け、価値観を表出することもあった。本班の予備的調査では、「両手を前方にかざす」身振りがそうした例に該当し、時代順に

著書紹介

（吉田優貴著・風響社・2018年）

『いつも躍っている子供たち』
― 舞・身体・ケニア ―

本書は、語学の苦手な私がどうやってケニアの寄宿制初等学校の就学生や周りの人たちと一緒に生活できたのかという疑問を出発点に、さまざまな場面において居合わせた人々に何が起きていたのか、身体に着目して描いたものである。具体的には、「同調」あるいは「共振」などと表現されてきた事象を、「主体」ないしは「個体」ありきという前提からひとまず離れて分節化することを試みた。

各章ではヴィジュアルな素材を多く用いて出来事を表現／分析した。章の間に挟んだ「ダイアログ」は、「フィールド日記の開示」ではなく、各章とは別のやり方で出来事を分節化したものである。章とダイアログは、それぞれ互いに対する伏線にもなっている。索引の人名欄のほとんどをフィールドで出会った人の名に割いたのはそのため、人物からも出来事をたどれるようにした。

索引の事項欄の大半が日常語なのは、可能な限り平易なことばで記述したためである。関連する研究や今後深めていきたい理論の多くは脚注に追いやった（本文で言及したため索引に載せた研究者は、Alfred Gell、Marcel Mauss、Steven H. Strogatz、坂部恵のみ）。

最後におこなった索引づくりを通して気づかされたことがある。それは、「顔」に関係する表現を意図せず多用していたことだ。私は〈身体〉に関わる研究をしてきたと自覚していたのだが、〈顔〉にも少なからず注目していたらしい。研究協力者として関わらせていただいているこの領域を通した出会いを大切にしながら、今後も研究を深めていきたいと考えている。

（A01-P01床呂班・吉田優貴）

研究成果報告

～赤ちゃんの顔認知の発達を縦断的研究から明らかに～

顔（正面顔）には顔の目や口などの内部特徴がすべて含まれているのに対し、横から見た顔（横顔）は目が一つで口も半分しか見えないなど、顔として見るための情報が少なくなっているためと考えられます。

赤ちゃんでは、正面顔は遅くとも生後5か月以降に顔として見ることができる一方、横顔は生後8か月にならないと顔として見るができないことが知られています。これは、2009年に中央大学と生理学研究所のグループによって報告されました。2009年の研究では、生後5か月児と生後8か月児、それぞれ10名を対象に、横顔を見ている時と正面顔を見ている時とで後側頭領域の脳血流反応に違いがみられるかを、近赤外分光法（Near-Infrared Spectroscopy; NIRS）によって計測することで明らかにしました。しかし、5か月から8か月までの間に、横顔を見る力がどのようなプロセスで発達しているかはまだ検討できていませんでした。

【研究内容と成果】そこで本研究では、生後3か月児14名を対象に、生後3か月から8か月まで毎月一回ずつ（泣いてしまつて計測できない月は2回、3回と…）計測に参加してもらい、正面顔と横顔、それぞれを見る力がどのように変わる

14 ✱

2018年3月1日から5日にかけて、A01-P01床呂班のオーガナイズにより、領域関係者によるワークショップ「トランスカルチャー状況下における顔・身体」がインドネシア・バリ島のサヌールにて

行われました。ワークショップには領域代表をはじめ、文化人類学・実験心理学・哲学の各班から20名超が参加しました。舞踊・仮面製作・絵画などのバリ島の芸術文化の見学や体験、パ

フォーマーやクリエイターとの交流、そして舞踊体験やフィールド実験チュートリアルを通して「顔・身体学」研究における異分野間の融合を一層進めることができました。



バリ島ワークショップ体験記

今回の国際ワークショップで私たちが多く目にしたのは、バリにおける「顔」であったと思います。舞踊や仮面、絵画にみられる「顔」ばかりでなく、道行く人々や其処此処で遭遇する神々の像の顔……。バリで多くの「顔」と出会い、「顔と出会う」ことについて考えさせられた日々でした。

はじめにそのことを実感したのは、バリ芸能を鑑賞したときだったと記憶しています。ここで私たちは、仮面舞踊劇と、仮面をつけない舞踊を鑑賞しました。舞踊の（化粧の）踊り手たちが一様に、微笑みを浮かべながら大きく見開いた瞳孔を動かして生み出す表情と、仮面をつけた踊り手が、演技によって仮面に与える表情。踊り手の化粧の顔と仮面の顔とは、対照が際立っているように感じられました。同時に、バリ舞踊に特有の身体技法を目の当たりにすることによって、それがバリ文化のなかで自然に身についた技法ではなく、長年の訓練によって獲得していく技法であることも体感することができました。一見対照をなすように感じられた踊り手の表情と、仮面の表情が、仮面の裏側を通して繋がっていることもまた、興味深いことでした。

それにしても、バリにおける仮面の多種多様さには目を見張るばかりでした。今回の企画の中心となった吉田ゆか子さんの研究が

ら多くを教えていただき、共同調査を試みている私にとっては、再発見と新たな発見の連続でもありました。というのも、仮面のなかには、バロンやランダといったヒンドゥ教の存在もあれば、王族たちのもの、そして一般の村人たちのものもあり、伝統的なものから、（日本の能面の手法を取り入れたような）モダンなものまであります。そこに作り手や踊り手、そして観客たちとの関係性も織り込まれていることから、一つ一つの仮面がもつ社会的文化的意味合いや、その仮面が埋め込まれている社会や文化のありように、改めて圧倒させられたのです。今回のワークショップでのご発表や訪れた仮面工房で伺ったお話からは、木材というモノが仮面という顔（身体）になるプロセスと、仮面というモノが生（命）を帯びるプロセスの両方を垣間見ることができたのでした。

バリという実地において、顔や身体表現の文化差に実際にふれることができる機会となったばかりでなく、「フィールド実験」の実施や、ケニア、ジャワ島、そして日本における事例に基づいた各研究班の方々のご発表にも学ぶことが多くありました。こうした機会を実現してくださった今回の国際ワークショップの企画担当者の皆様に、ここに記して感謝の意を表します。

（A01-P01 床呂班・東日本国際大学健康福祉学部 田中みわ子）

仙台市で開催された日本心理学会第82回大会において、公募シンポジウム「顔魅力の心理学」が開催されました（企画代表者：早稲田大学 渡邊克巳教授、企画者：中央大学 山口真美教授、指定討論者：日本女子大学 金沢創教授）。今回のシンポジウムでは、国内外から5名の話題提供者をお招きし、顔の魅力をテーマとした多様な心理学的研究についてご講演いただきました。まず、セント・アンドリュース大学 デイヴィッド・ベレッ

ト教授は顔魅力評価の文化的多様性の形成メカニズムについて最新の研究成果を紹介され、続いて早稲田大学 中村航洋氏が計算モデリングの手法を用いた日本人の顔魅力評価の研究について紹介しました。花王株式会社 三枝千尋氏は顔魅力の即時的な知覚とその情報統合過程について、大阪大学 入野宏教授は顔のかわいさとその顔特徴について、認知心理学の立場から両氏のご研究を紹介くださいました。最後にカリフォ

ルニア工科大学 下條信輔教授は顔魅力の潜在的認知の背後にある認知神経科学的メカニズムについて数多くのご自身の研究成果とともに話題を提供くださいました。シンポジウム会場は多くの来場者で満席となり、顔魅力の心理学をめぐる現状と展望についてフロアを交えて多角的な議論が交わされました。



本領域では哲学班が主体となって広く一般の方が参加できるサイエンスカフェ「顔身体カフェ」を企画しています。第3回顔身体カフェではA01-P02高橋班とC01-P01河野班の主催で『顔を描く・顔を描かれる・顔を知る』というタイトルで顔身体カフェを開催しました。イントロダクション（河野）、フィールド実験に関するプレゼ

ン（高橋）の後、自分の顔を描く、他人に顔を描いてもらう、というワークを行いました。最初は顔を描くことに戸惑いもありましたが、だんだんと時間が経つうちに、お互いに話をしながら顔を描くようになっていきました。顔を描き合うことがコミュニケーションを加速させているようにも見えました。

休憩をはさみ、2グループにわかれて哲学対話を行いました。テーマは「顔を描くとはどういうことか」「顔の認識とは?」。難しいテーマでしたが、顔を描く、描かれるというワークで気づいたことも含めて、様々な意見、考えが飛び交いました。



3月2日から3日にかけて、領域主催国際シンポジウム「トランスカルチャーとは何か？心理学と哲学の協働」を開催しました。本領域を構成する3分野(文化人類学班・心理学班・哲学班)共同のイベントで2日にわたり行われました。

初日(2日)は新宿区牛込筆筈区民ホールにて、「現代における顔身体の変容」と題し、心理班が中心となり、共催の「多元質感知」領域からの協力もいただき、顔にリアルタイムでプロジェクションマッピングを

行う技術展示を体験しながら、哲学班代表、心理班代表2名、登壇者2名が身体性についての議論を行いました。

翌3日は、会場を御茶ノ水のワテラスコモンホールに移し、様々なトランスカルチャーを研究する新進気鋭の若手の発表を中心としたシンポジウムとなりました。哲学班からはトランスジェンダーという性の境界に関する事例、文化人類学班からはバリ島仮面劇における外国人の役の登場や、多人種ルーツを持つ

アジア系アメリカ人を事例として、解放される身体と拘束される身体、越境の苦しみに対峙しつつ新たな変容を生み出す過程について論じました。両日とも50名以上と予想以上の参加者をお迎えし、シンポジウム終了後の情報交換会も、多くの参加者が既存の班の枠を飛び越えて活発な議論をする場となり、新たな学術領域の創成を実感する会となりました。

プログラム概要

▶3月2日@牛込筆筈区民ホール(東京都新宿区)

- I 現代における顔身体の変容
(共催：新学術領域研究「多元質感知」)

▶3月3日@ワテラスコモンホール(東京都千代田区)

- II トランスカルチャーとは何か
III トランスカルチャー下での顔身体=自己変容
IV ジェンダー変容下での顔身体=自己変容

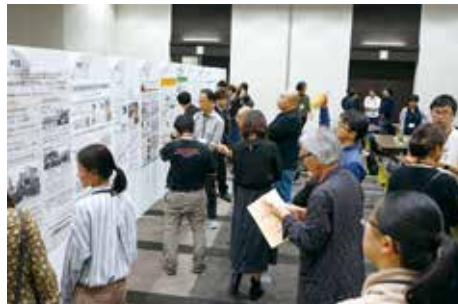


領域会議

第2回領域会議(2018年6月9日～10日 東京女子大学)



第3回領域会議(2018年12月26日～27日 沖縄県市町村自治会館)



イベント報告(2017年12月～2019年3月)

日時	A01	B01	C01	種類	内容
2017/12/01	o	o	o	[会議]	第1回領域会議
2017/12/02	o	o	o	[シンポジウム]	トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築 第2回公開シンポジウム
2017/12/23		o	o	[アウトリーチ]	第1回 顔身体カフェ
2018/01/18		o		[シンポジウム]	日本視覚学会 2018 年冬季大会大会企画シンポジウム「多文化をつなぐ顔と身体表現」
2018/01/20		o		[研究会]	平成 29 年度 第 2 回基礎心理学フォーラム
2018/01/20-21			o	[アウトリーチ]	第 2 回 顔身体カフェ
2018/02/16		o		[研究会]	平成 29 年度第 2 回心理班若手公開研究会 (中央大学人文研共催)
2018/03/01-05	o	o	o	[研究会]	バリ島ワークショップ
2018/03/13-14			o	[シンポジウム]	公開シンポジウムと B. アンドリュウ講演会「間とあいだの比較現象学」
2018/03/16		o		[研究会]	平成 29 年度第 3 回心理班若手公開研究会
2018/05/19	o		o	[シンポジウム]	「身体的経験をめぐる人類学と現象学からのアプローチ—不完全な身体、人種と身体、妊娠期の身体の実例から」
2018/06/02-03	o	o		[研究会]	文化人類学会分科会「文化人類学と異分野のコラボレーション」
2018/06/09-10	o	o	o	[会議]	第 2 回領域会議
2018/07/26		o		[シンポジウム]	日本神経科学大会シンポジウム「個性と身体表現の創発に関わる神経機構」
2018/07/29		o		[アウトリーチ]	トークイベント「ヴァーチャル世界でワタシはどうなる？」
2018/08/02-03		o		[研究会]	電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会「顔身体学」セッション開催
2018/08/21	o		o	[シンポジウム]	「ムスリム女性のヴェールをめぐる学際研究」
2018/08/22		o		[シンポジウム]	国際シンポジウム「人と人の間にあること：協調と競合の対人間ダイナミクス」
2018/08/24			o	[研究会]	ヘレン・ンゴ『人種差別の習慣』合評会
2018/08/25			o	[シンポジウム]	シンポジウム「差別と人種の現象学」
2018/09/01		o		[シンポジウム]	フォーラム顔学 2018 シンポジウム
2018/09/25		o		[シンポジウム]	日本心理学会大会シンポジウム「顔魅力の心理学」
2018/11/04	o	o	o	[アウトリーチ]	第 3 回顔身体カフェ「顔を描く・顔を描かれる・顔を知る」
2018/11/12		o	o	[シンポジウム]	ショーン・ギャラガー招聘シンポジウム「匿名の視線と自己の成立」
2018/11/22		o		[シンポジウム]	中央大学人文科学研究所共催シンポジウム
2018/11/25	o	o	o	[シンポジウム]	第 3 回 AA 研公開シンポジウム
2018/12/26-27	o	o	o	[会議]	第 3 回領域会議
2019/02/17			o	[アウトリーチ]	第 4 回 顔身体カフェ
2019/03/01		o		[研究会]	心理班若手勉強会
2019/03/02-03	o	o	o	[シンポジウム]	「トランスカルチャーとは何か？心理学と哲学の協働」
2019/03/24			o	[シンポジウム]	哲学班シンポジウム「インゴールドと「あいだ」」

受賞報告

河野哲也	C01-P01	アジア・テレビ賞 (Asian Television Awards) ファイナリスト
高橋康介	A01-P02	The Young Psychonomic Scientist of the Year 2018 受賞
山田祐樹	A01-K103	日本心理学会国際賞奨励賞受賞
河原美彩子	B01-P03	日本心理学会第 82 回大会優秀発表賞受賞
中村航洋	B01-P02	2017 年度日本基礎心理学会優秀発表賞受賞
小林恵	B01-P01	2017 年度日本基礎心理学会優秀発表賞受賞
氏家悠太	B01-P01	平成 30 年度発達科学研究教育奨励賞受賞
中島悠介	B01-P01	日本基礎心理学会第 37 回大会若手オーラルセッションファイナリスト
高橋康介	A01-P02	日本基礎心理学会第 37 回大会若手オーラルセッションファイナリスト
佐々木恭志郎	B01-P02	日本基礎心理学会第 37 回大会若手オーラルセッションファイナリスト
楊嘉楽	B01-P01	日本基礎心理学会第 37 回大会若手オーラルセッションファイナリスト



**新学術領域研究
「顔・身体学」事務局**

E-mail : contact@kao-shintai.jp
WEB : <http://kao-shintai.jp>

今後のイベント

- | | |
|-------------------|--|
| 2019年8月3-4日 | 第4回領域会議 |
| 2019年8月(予定) | 国際シンポジウム(トニー・チェメロ氏・ジャン＝ミシェル・ロワ氏招聘) |
| 2019年9月11-13日(予定) | 心理学会シンポジウム(ジョナサン・コール氏招聘) |
| 2019年9月14-15日(予定) | 顔学会シンポジウム(ジョナサン・コール氏・茂木健一郎氏・河野哲也) |
| 2020年3月(予定) | ジャカルタ・インドネシア科学院にてアジアにおける顔・身体表現に関する国際シンポジウム |
-